

概念分析再考

倉田 剛 (九州大学)

「分析哲学」とはいかなる哲学流派なのでしょう。多くの論者も指摘するように、「分析哲学」と称するすべての哲学がもち、かつそれらだけがもつような性質（本質）は存在しないでしょう。それでは、歴史的な起源によって「分析哲学」を、他の哲学流派から区別することはできるでしょうか。これに関しても難しいと言わざるをえません。（やや古い見方とはいえ）ムーア、ラッセル、イギリス経験論を分析哲学の起源とみなす論者もいれば、中央ヨーロッパの哲学と論理学、すなわちボルツァーノとフレーゲを起源と捉える論者もあり、いまだ見解の一致をみてはいないからです。（意外なことに、後者には、ブレンターノやフッサールといった「別の哲学流派」の始祖たちが加わることもあります。）こうしたことを考えあわせると、何らかの「本質」もしくは特定の「歴史的起源」によって、分析哲学を厳密に同定しようとする試みが成功する見込みは薄いと思われま

す。とはいえ、このことは、多くの分析哲学者たちが伝統的に用いてきた方法について語ることを禁ずるものではないでしょう。その方法は「概念分析」(conceptual analysis) と呼ばれます。日本を代表する分析哲学者である飯田隆氏はその著書『分析哲学これからとこれまで』（勁草書房、2020年）の中で次のように述べています。

「分析哲学」という名称に含まれている「分析」の対象は、ふつう、言語であると考えられています。そして、そう考えることは誤りではないのですが、言語の分析を通じて目指されているのが概念の分析であることは、見落とされてはならないでしょう（34頁）。

飯田氏によれば、「哲学の問題の多くは、概念にかかわる問題」であるがゆえに、哲学者はそれを明瞭な仕方で把握する必要があります。ところが概念自体は「目に見えるものでも、耳に聞こえるものでも」ありません。ここで分析哲学がその力を発揮します。ふたたび飯田氏の言葉を引用しておきましょう。

概念を明瞭な仕方で把握するためには、その概念にかかわる言語表現を、自分たちがそのように使っているのか、より正確には、どのような使い方が正しいと自分たちがみなしているのか、明瞭にされればよいということになります（同頁）。

これは「言語分析」と呼ばれる方法です。要するに、飯田氏は分析哲学の方法である「概念分析」は、概念を表現する言語の分析によって遂行されると主張しているのです。この飯田氏の主張は、分析哲学の「スタンダード」と言えるかもしれません。

しかしながら、分析哲学の代名詞でもあった概念分析という方法は、もはや「時代遅れ」

だと考える哲学者も増えています。なぜでしょう。

第一に、それは言語分析に対する態度の変化があったからだと思います。実際、「哲学者の仕事は言語分析である」という考え方に疑問を抱く分析哲学者たちが増えたことは事実です。「概念分析は言語分析を通じて（のみ）遂行される」という主張から、彼らが「概念分析」と「言語分析」をほぼ同義であると結論しても不思議ではありません。

私が比較的良好に知っている分析形而上学の分野でも、概念分析の代わりに「純粋に形而上学的な分析」(purely metaphysical analysis)を好む哲学者たちがすでに多数派を占めているように見えます。具体的に言えば、それは「トゥールース・メイキング」や「グラウンディング」や「スーパーヴィーニエンス」などを使った分析です。この発表の中で私は、「概念分析＝言語分析」という捉え方をする必要はないことを指摘し、そうした捉え方から生じた誤解の一部を取り除くつもりです。

第二に、概念分析の「厳格さ」がその不人気に寄与してしまっているような気がします。確認しておく、Fという概念を分析するとは、何かがFであるために必要かつ十分な条件を見つけ出すことです。たとえば〈父〉という概念を分析するとは、何かが父であるための必要十分条件（男でありかつ子をもつ）を特定することです。言い換えれば、それは「父」という語の定義を与えることに他なりません。私が「厳格さ」という言葉で意味しているのは、哲学的に重要とされるほとんどの概念分析（〈知識〉でも〈因果〉でもかまいません）は反例から自由ではない、ということだけではありません。それに加えて、概念分析（を表現する普遍量化された双条件文）が真であれば、それは——すべての可能な対象に当てはまるとため——「必然的に真である」と言われることも「厳格さ」の一部として捉えています。さらに、概念分析は、概念を表現する語の意味のみによって真であるとされ、これより、「分析的に真である」とも言われます。私はこうした「厳格さ」は見直されるべきであることを本発表の中で主張したいと思います。

第三に、概念分析の「緩さ」も概念分析の信頼性を損なう原因のひとつになっているのではないのでしょうか。（概念分析は「厳密さ」と「緩さ」をあわせもつ方法です。）私は「緩さ」という言葉で、概念分析はもっぱら哲学者の「直観」によってテストされるという見解を指しています。たしかに分析哲学の多くの議論では、ある分析に対する反例は、しばしば哲学者が「常識」とみなす直観に訴えて提出されます。しかしながら、少なからぬ論者たちによって、こうした直観があてにならないことが指摘されてきました。私自身は「直観によるテスト」という考え方は、「哲学的直観」と呼ばれてきたものの内実を再検討ことによって維持できると考えます。また、昨今の「経験的な手法」（実験哲学）による解決策への私なりの疑問も提出するつもりです。

まとめると、私はこの発表の中で、概念分析とはどのような方法であるのか、そしてどのような方法であるべきかを考えます。この考察を通じて私は、概念分析について指摘されてきた数々の困難にもかかわらず、それは分析哲学の、ひいては哲学そのものの根幹であり、またそうであることが望ましいという記述的かつ規範的な主張を擁護するつもりです。